

同志社女子大学一般入試現代文対策講座

○同志社女子大学の現代文について（傾向と分析）

2017年度入試出題出典

- 一月二十六日 杉田敦 『政治的思考』
一月二十七日 高階秀爾 『日本人にとって美しさとは何か』
一月二十八日 中沢新一 『日本文学の大地』
一月二十九日 平川克己 『経済成長という病―退化に生きる、我ら』
2018年度入試出題出典
一月二十六日 田端博邦 『幸せになる資本主義』
一月二十七日 竹井隆人 『社会をつくる自由―反コミュニティのデモクラシー』
一月二十八日 藤野寛 『承認』の哲学 他者に認められるとはどういうことか』
一月二十九日 平瀬礼太 『〈肖像〉文化考』

【対策について】

☆ 試験直前の時期に何を意識すべきか

とにかく過去問の演習を！（設問のパターンを意識しておこう）

「漢字語句系問題」

本学過去問とセンター試験過去問で最後の仕上げを

「語句・文章挿入系問題」

接続詞はその働きに注目

語句挿入は、選択肢間の意味の違いを明確に

脱文補充は文章の意味のつながりを意識

「文章内容系問題」

とにかくできるだけ早く『本文の着地点（主旨）』を読み取る

☆ 文章を読むスピード、主旨をつかむ精度を上げるためには
『入試問題を読むこと』が最善かつ催促の対処法！！

「文章を読み解く力とはいったい何か？」

現代文は『冒頭』に着目することが必須

論説文の設問の典型的な構造から入試問題を分析

※ 設問が成立するためには、ある一定の条件を満たさなければならぬ

☆『前提』 ↓ 『問題提起』 ↓ 『論証』 ↓ 『種明かし』

・『前提』がもつ意味合い

・そして『問題提起』が現れる

・『論証』はどのように問題に問われるのか

・『主張』はここで『再確認』されることに

入試問題の設問は、ひとつの物語を効果的に表現する誘導である

過去問演習で考えてみよう

肖像画は私たちの身近にあふれている。多くの人がいろいろな場所（例えば学校や会社）で見てきたものであり、肖像写真も写真館のウインドウや家の仏間に飾られた先祖の写真など、至る所にある。運転免許証やパスポートなどの証明写真もその一種とすれば、誰でも持っているものといえよう。また、肖像という言葉もごく一般的で、「家族の肖像」とか「平成の肖像」というような **I** 的な使い方も多い。例えば「昭和の肖像」であれば、時代としての昭和のそれらしき姿、昭和の多様な姿を総じて表している。

「肖」の意味は、「にる」「あやかる」であり、もともとからだを小柄にするという意味から、「からだつきがにる」に意を転じたようである。さらに手元の古語辞典を引いてみると大変面白いことが書いてある。「肖り」といえば不安定に揺れ動くこと、動揺して変化することを意味するという。この意味でもし肖像という言葉を使うなら、似ている像というよりも、不安定に揺れ動く像ということになる。こういう使い方は普通しないとしても、このような含意がありうると思える。また名詞形として「肖り」の使い方としては、影響を受けて変化する、影響を受けてそれに似る、人まねをするというものがある。また名詞形としては愚かな者という意味もあって、これが像となれば愚かな者の像ということになるが、さすがにこんな使い方は聞いたことがない。そういえば「不肖くは」という言い方がよく使われるが、父に（もしくは師に）似ず劣ること、愚かな者という意味で **II** する場合に使用されている。

「あやかる」という言葉にもう少しこだわってみよう。一般に、影響を受けて同じ状態になるジョウウキョウや、他人の幸運や成功を味方につける場合に使われる。これに像をつけると肖る像ということになり、これはぴんとこないようでもあるが、肖像という言葉の本質のイットタンを表しているように筆者には思われる。肖像の対象となるのは常人や目上の人物である場合が圧倒的に多い。時に崇める宗教の対象であり、敬うべき祖先であり、景仰する人物の肖像を尊いと思うと同時に、徳望や睿智にあやかりたいという気持ちがかもっているように思われるのである。

『日本美術史事典』の東洋の肖像の記述によると、肖像は「肖」に似すがたであって、像主の外観はもとより、全人格を内在させたものでなければならなかった。中国の肖像画は勅戒画（悪を戒めるための絵画）もしくは聖賢像として成立したが、そこでは像主との相似性（肖似性）が当然要求されるだけでなく、内面的な全人格、境遇の表出も不可欠であった。このような外見上の写実と内面へのハクシンを「伝神写貌」と称し、肖像の価値判断の基本概念を成立させたという。中国、六朝東晋時代の画家、顧恺之は「伝神とは精神を伝えることであり、写貌はそのための手段である」とし、「眼は心の窓」として真なるものを表現するためには「点眼」（瞳を描き入れること）を肖像画制作第一の課題としていた。

しかし疑問に思うのは、内面の表現とはどういうことなのかということである。「肖像」が絵姿であり、二次元的な姿を見るためのものであるとするならば、写実を行うだけで（その外見から）内面も読み取れるはずではないのか。すなわち、外見上の写実に内面性を加えるということは、そのままの「見た目」に、何らかの内面性と見なされうる要素を無理に付加することにならないのか、という疑念がわきあがる。おそらく写真以前の東洋の肖像は、最低限の写実的容貌を保ちながら、例えば威厳であるとか、誠実さ、知性などが読み取れるような表情のコードに従ってカラーージュして、その人物に期待される「全人格」を表す必要があったということであろう。

容貌を手がかりに人物像をとらえる、表情を読み取るということは日常的に為される。だが、一方からとらえられた固定されたイメージは、その人物の一瞬の姿を顕現させる表面的なものではなく、見た目からは探りえない不可知な部分があることは認めねばなるまい。逆説的に言えば、だからこそ肖像を読み取るという行為（あるいは表情を読み取るという行為全般）は、像そのものを越えた過剰な意味を背負って存在するものなのだろう。人は表情から読めるはずもない感情を勝手に誤読し、それのみではわかりえないはずの人物の性格を肖像から類推する。もちろんこういうことが無意味であると述べているわけではな

い。過剰に意味を見出しがちだということを指摘しているだけである。

ここで想起されるのが似顔絵である。「似顔絵」という文字に注目すれば、肖像と同様の意味になるように思われる。しかし実際には、この二つはニュアンスを異にしている。似顔絵はより身近で手軽なイメージがある。さらに重要なのは、似顔絵が人物の個性や欠点を強調することで特徴を際立たせるような効果を持っていることであろう。一筆書きのような線描でもその人物らしく見えるのは、当人と他の人物を分かちつ特徴を誰にでもわかるように誇張することに起因する。

実は肖像も程度の差はあれ、似顔絵と同様の要素を持っている。全般に似顔絵よりも質感や写真的リアリティを持つがゆえに、誇張にあまり気付かれないということであろう。

肖像は、本来多様である(様々な表情を持つ、年齢により異なっていくなど)人間の像をある典型で代表させる。人物の特徴をとらえ、中心的でない要素を **Ⅱ** する。さらには内面的特徴(例えば優しいとか、厳格であるとか)を示す表情を外見に加えていく。 **A**、負の面も含めた全人格を提示することなどできうるはずもなく、肖像が総合的人格を表すとは言いがたい。

B、そのような限界を超えて、もしくは限界を承知しながらも、私たちはその人物を代表するに相応しい容貌と人格の表現を湛えた絵姿、望むらくは理想的な絵姿に身代わりを演じさせ、肖像は後世にまで視覚的イメージとして伝わることとなるのである。源朝朝をはじめ、教科書などで紹介された像主でさえ、研究が進むにつれ、疑念が呈される例がある。肖像に描かれた人物の伝来が確かであっても、これまで記してきたように、もともと肖像が全人格をとらえる種のものではないことは明白である。

C、多くの場合、肖像がその人物をそれなりに忠実に表していると思なされることも確かである。いちいち真の姿かどうかアンセキするなど面倒な話であるし、西郷隆盛肖像のように、本人をモデルにできずに作られたにもかかわらず、また本来どんな風貌だったかわからないにもかかわらず、それ以外の顔を思い出すのは困難なほど普及したものもある。このように考えていくと、肖像は似せるという要素があると同時に、その人物に対して期待すべき人格なり徳望なりを表象するという側面がある。

面があることがわかるであろう。ある意味では理想的な像として肖像は存在する。

加えて肖像を考えるに厄介なのは、依頼主と描き手の問題である。依頼主の多くは、なるべく像主(依頼主本人であれ、先祖や崇敬する人物であれ)を様々な意味で良く見えるように依頼する。描き手はそのヨウセイに忠実に描こうとする場合が多からうが、ここでいくつかの問題が浮上してくる。描き手の技術が追いつかなかった場合の問題、そして表現意欲の問題である。下手な画家であれば、容貌を似せるのは困難である。その上、期待すべき人格も表現できず、従って肖像としての機能を果たせない。

D 特に近代における芸術表現の問題と肖像との関係がある。オリジナリティ、個性と先駆性が評価の基軸となる芸術、美術の範疇では、形似という観点にはそれほど重きをおかれない。レンブラントの肖像などでは表現の深み、心理描写などが高く評価されるが、まだ容貌の近似も論点として活きている。これが時代が下って近代の人物表現となると、似ることよりも、表現性やコンセプトの方が大切となってくる。ピカソのモデルとなった人物が、できあがった肖像を見てこんなものは自分の顔ではないと憤慨するという話はいかにもありそうなことであるが、像主が自分との同一性を認められないような肖像が美術の世界では珍しいものではなくなっている。もちろん美術家は写真的近似とは異なるリアリティのもとで制作しているわけであり、表現性が増したからといって必ずしも美術家がリアリズムを失ったというわけではないことは付記しておかねばならないだろう。ただしこの時点での芸術的肖像は、当初持っていた身代わりの肖像としての意味を限りなく希薄にしていることになる。外見的 **M** 性や人格の描出と芸術的表現性の相克があったとしても、それはかえって肖像の表現領域を深く広くこそすれ、阻害するものではない。

(平瀬礼太「肖像」文化考)より。ただし本文の一部を改めた。)

問一 傍線部 a~e と同じ漢字を使うものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号は a 1・b 2・c 3・d 4・e 5。

- | | | | | | |
|---|----------|---|--------------|---|-------------|
| 1 | a ジョウキョウ | 1 | ドキョウをつける | 9 | キョウジュンの意を示す |
| 2 | b イツタン | 4 | 音楽をキョウラクする | 5 | キョウイ的な記録を出す |
| 3 | c ハクシン | 1 | タンリヨを起こす | 7 | タンサイの風景画 |
| 4 | d ブンセキ | 4 | タンなる暇話だ | 3 | タンを発する |
| 5 | e ヨウセイ | 1 | ハクシキな学者 | 2 | キョウハク神経症 |
| | | 4 | 実力ハクチュウ | 5 | ハクシエ喝采 |
| | | 1 | 無セキツイ動物 | 2 | 反対派をハイセキする |
| | | 4 | 重要なセキムを負う | 3 | 有名なシセキを訪れる |
| | | 1 | 旅費をセイキユウする | 2 | キセイ品を注文する |
| | | 4 | 自己の怠慢をモウセイする | 5 | 校歌をセイシヨウする |
| | | | | 3 | セイドウでできた皿 |

問二 波線部あいうの語句は、文脈上、どのような意味か。最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号はあ 6・い 7・う 8。

- | | | | | | |
|---|---------|---|----------------------|---|----------------------|
| 6 | あ 範疇 | 1 | 特定の領域における暗黙のルール | 2 | 他と区別するための固有の特性 |
| 7 | い コンセプト | 3 | 同じ性質のものが属する範囲・領域 | 4 | その分野における理想的な在り方 |
| 8 | う 相克 | 4 | 広く受容されている一般的な概念 | 2 | 通常ではありえない大胆な発想・発見 |
| | | 1 | 個別性を超越した普遍的な認識 | 4 | 全体を貫く基本的な視点や考え方 |
| | | 3 | 客観的にとらえられた物事のあり方 | 2 | 対立するものがそれぞれ自己を高めること |
| | | 4 | 表現者の条件としての独自の感性 | 4 | 対立するものが互いに欠点を補いあうこと |
| | | 1 | 対立するものがまじり合い一体化すること | 2 | 対立するものが互いに勝とうとして争うこと |
| | | 3 | 対立するものが互いに勝とうとして争うこと | 4 | 対立するものが互いに欠点を補いあうこと |
| | | 4 | 対立するものがそれぞれ相手を認め合うこと | | |

問三 空欄 A~D に入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを重複し

て用いることはできない。解答番号は A 9・B 10・C 11・D 12。

① さらには ② 例えば ③ しかし ④ こうして考えると ⑤ ただし

問四 空欄 I~IV に入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号は I 13・II 14・III 15・IV 16。

- | | | | | | | | | | |
|----|----------|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 13 | I ① 衆人 | 2 | 隠喩 | 3 | 形式 | 4 | 枕詞 | 5 | 具体 |
| 14 | II ① 経度 | 2 | 揶揄 | 3 | 比較 | 4 | 否定 | 5 | 謙遜 |
| 15 | III ① 加味 | 2 | 投射 | 3 | 昇華 | 4 | 捨象 | 5 | 抽出 |
| 16 | IV ① 普通 | 2 | 抽象 | 3 | 写実 | 4 | 社会 | 5 | 現実 |

問五

傍線部ア「肖像という言葉の本質」とあるが、筆者は「肖像」をどのようなものだと考えているか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は17。

- ① 敬い景仰すべき人物の似すがたであると同時に、描き手がとらえたその人物の内面的な全人格を像として明確に示しているもの。
- ② 対象となる人物の外観や内面性に似せようとしながらも、描き手の心理に応じて不安定に揺れ動きながら変化していくもの。
- ③ 人々が徳や智にあやかりたいと願う偉人の全人格を内在させたものだが、誰もが手にすることができ、身近で一般的なもの。
- ④ 人々があやかりたいと願う宗教の対象の似すがたで、外見上の相似性だけでなく、内面的な全人格の表出が不可欠であるもの。
- ⑤ その人物に期待する人格や徳望などを表象するが、対象の多様な姿を典型的に描くもので、全人格を表してはいないもの。

問六

傍線部イ「内面の表現とはどういうことなのか」とあるが、そのことをめぐる筆者の考えの説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は18。

- ① 写実的な表現に、内面を無理に付加して描く必要があるときもあるが、そこに表れているのはその人の内面の一部ではないので、我々はそのから読み取れるはずのない全人格を勝手に読み取るという無意味なことは避けるべきだ。
- ② 写実的に描いただけで、内面を正しく表現し、内面を正しく読み取れるかは疑問だが、容貌から内面を読み取るという行為は日常的になされていることなので、過剰にならないよう留意しつつ類推することは望ましいことだ。
- ③ 二次元的な写実だけで、内面を正確に表現し、また内面を正しく読み取れると考えることは無理があるし、表現されたものから感情や性格を読み取ろうとすると、誤ったり行きすぎたりするという結果に陥りがちである。
- ④ 写実的な表現である肖像から、内面を正しく読み取れることは可能なので、そこに更に内面を付加して描くことは不要で、逆にそうすることで、勝手に感情や性格を読み取ろうとするという、過剰な解釈を生み出す恐れがある。
- ⑤ いくら写実的に表現したとしても、一方からの一瞬の表情だけでは、その人の内面の全てがわかるはずもないので、外見ではなく内面を表現できるように描くことで、勝手な解釈や類推がおきないようにするべきである。

問七

傍線部ウ「肖像も程度の差はあれ、似顔絵と同様の要素を持っている。」とあるが、似顔絵との関係における肖像についての筆者の考えの説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は **19**。

- ① 肖像は、その人物の特徴を誇張を含んで分かりやすく表現するものであるが、似顔絵のように欠点まで含めた全体像を線描で表現することはできず、あくまでも期待される人格を表象するものとして存在している。
- ② 肖像は、全人格を表さず、似顔絵と同様に多様な要素の中の特徴的な部分を取り出して誇張するものであり、その人物に期待されている理想的な姿を表現したものである。
- ③ 肖像は、似顔絵と同様に当人と他の人物とを分かつ特徴を誇張して描くものであり、その人に期待される一部の内面的特徴だけを描くことで、理想像ではありながら、本人に似せるといふ本来の目的を失っている。
- ④ 肖像は、似顔絵と同様に個性や特徴を誰にでもわかるように誇張して描くものでありながら、その人物の真の姿を忠実に描くことにも成功していて、その人物の理想的な絵姿として後世にまで伝わっていくことが可能となっている。
- ⑤ 肖像は、個性や特徴を際立たせながら質感やリアリティをもって描くという点では似顔絵に及ばず、あくまでも期待すべき理想像として描かれたものである。

問八

傍線部エ「近代における芸術表現の問題と肖像との関係」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は **20**。

- ① 近代の芸術表現では、評価の基軸の変化に伴って表現性は増したが、描き手の技術力が伴わないこともあって、身代わりの肖像としての意味は薄れている。
- ② 近代の芸術表現では、容貌の近似は論点としては生きていても、観点としては重きを置かれておらず、身代わりの肖像としての意味が希薄になっている。
- ③ 近代の芸術表現では、容貌の近似は評価の基軸とはならないため、写実的リアリティは失われたが、肖像の表現領域は広がりを見せ、表現性も増している。
- ④ 近代の芸術表現では、モデルと肖像が全く似ていないことが多く、モデルを怒らせてしまうような事態も起こりうるため、ある種の写実的リアリティを保持しようとしている。
- ⑤ 近代の芸術表現では、オリジナリティや目新しさを評価の基軸とし、外見的な近似には重きを置かなくなった結果、肖像の表現領域はむしろ狭くなった。

問九

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 21。

- ① 肖像はその人物の視覚イメージとして伝えられるが、肖像画の人物の伝来が不確かな場合は、有名な肖像画であっても、その全人格を伝えていないものが存在する。
- ② 肖像については依頼主と描き手の間に横たわる問題がいくつかあり、そのことによって肖像画が十分にその機能を果たせないという事態が生じてしまうことがある。
- ③ 東洋では肖像に人格を内在させ、精神を伝えることが肖像の目的とされたが、西洋では表現の深みや描写力が評価され、人格の表現はさほど重視されなかった。
- ④ 「肖」には不安定に揺れ動くという意味があるように、肖像画が揺れ動く像であるということは興味深い観点であり、事実、肖像画の見方は時代の影響を受けて多様に変化してきた。
- ⑤ 肖像には、表現された姿が真の姿かどうかの判断を経ず、真実だと見なされているものもあるが、そのような肖像が像主の理想的な姿を伝えることはない。